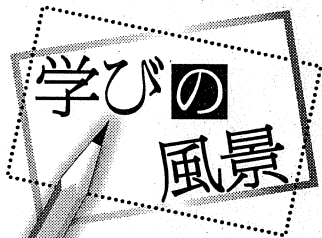
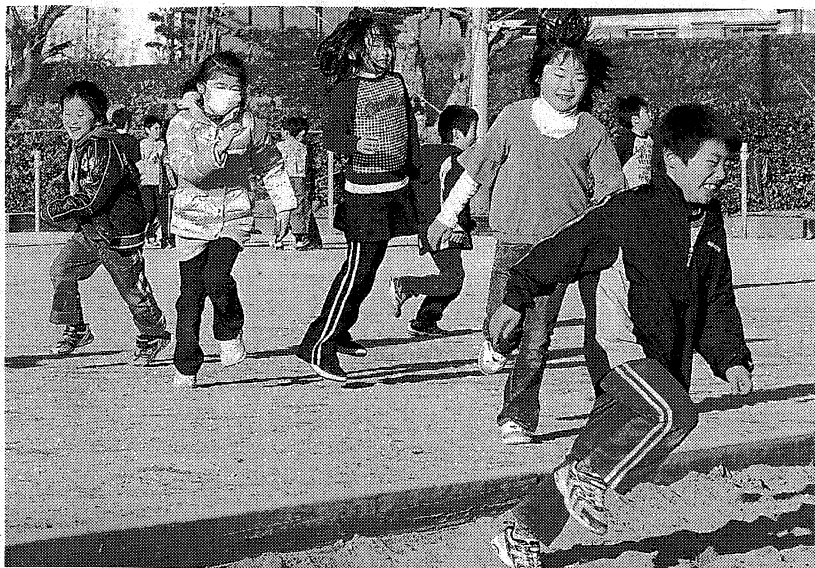


# 群れ遊び 心も体も成長



運動場で元気いっぱい走り回る仁川小の子どもたち 宝塚市仁川宮西町



夕方、宝塚市立仁川小学校の運動場。大勢の子どもがサッカーをしたりジャングリングで遊んだりしている。校舎内のコミュニティ室にも続々と児童が集まってきた。友だちと卓球をしたり将棋をしたり。おもちゃのプロ

ックで遊んでいる子もいれば、静かに宿題をしている子もいる。校内を歩きながら、さりげなく子どもたちの様子を見守っている女性がいた。ポランティア団体「放課後遊ぼう会」の代表、足立典子さん。遊びの最中に不慮の事故が起きないように注意し、子どもがけがをすれば駆けつけて応急処置もする。地域の方で児童らの遊びを支えようという「放課後子ども教室」の取り組みだ。

## 放課後子ども教室

(宝塚・仁川小)

2001年、当時小学2年の長男を仁川小に通わせていた足立さんは、公園や学校の運動場にほとんど子ども姿がないのが気になった。テレビゲームの隆盛に加え、子どもをねらった凶悪事件が全国的に相次ぎ、大人の目が届かない場所で児童を遊ばせることに不安を覚える保護者が増えた。「それなら見守り専門の大人が学校にいればどうだろう」と、保護者3人で「遊ぼう会」を立ち上げた。放課後になると、地域ボランティアに加え、安全管理の面から子ども遊びをサポートする「プレイリーダー」と呼ばれる専門スタッフが校内に常駐する。プレイリーダーは「遊ぼう会」が県などの補助を受けて独自に雇っている。教師らを除き、校内に3人以上の大人が常にいるよう

シフトを組んでいる。ただし、大人は子どもの遊びには干渉しない。主体はあくまで子ども。大人の役割は遊具を定期的に点検したり、万が一、不審者が入ってきたりすれば笛を吹いて危険を知らせたりすることなどだ。3年2組の松崎佑太君(9)は「遊ぼう会が好きで毎日のように来ている。5年生や6年生も遊んでくれるし、家が遠い友だちとも遊べるのが楽しい。特にみんなで鬼ごっこをするのが好きです」。01年の発足当初は週3回で子どもの参加は1日平均で10人ほどだったが、今では平日の週5回実施し、だいたい70人が集まる。多い日は全校児童の約4分の1以上にあたる200人近くになることもある。

放課後子ども教室 2007年度から始まった文部科学省の事業。空き教室や運動場などを活用し、地域の協力を得て学習やスポーツ、文化活動をすすめる。取り組み内容は地域が決める。共働きやひとり親家庭の子らを対象にした放課後児童クラブ(学童保育)とは異なり、すべての児童が対象。県教委によると、県内では現在361カ所があり、約45%の小学校で導入されている。

1年生の中崎雪音(8)さん「遊ぼう会」に参加させている母かおりさんは「子どもだけで公園に行かせるのは不安ですが、大人の目があり、外部から簡単に入って来られないスペースがあることは安全でありがたい」と話す。昨年11月、会は子どもの参加が多いことや、自由な遊びを尊重していることが評価され、文部科学省から表彰を受けた。足立さんは「子どもは群れて遊ぶことで心も体も成長する。自由に遊ぶことでいろいろな仲間とふれあい社会性も出ると思う」と話す。(大西史恭)